



第48号
 発行日 1月11日
 発行所 真徳山 天林寺
 発行者 伊藤文元
 〒430-0905
 浜松市中央区下池川町27-1
 TEL (053) 471-6226
 FAX (053) 471-6234

ご縁に結ばれています



天林寺住職

伊藤文元

皆さまあけまして

おめでとうございます

令和七年乙巳仏紀二五九一年
西暦二〇二五年の新年にあたり、
檀信徒の皆様方のご健康とご多
幸を心より祈念申し上げます。

昨年は当山の創建のこと、ご
開山傑堂義俊禅師のご生涯など
お話ししましたが、ご承知の通
り、疎開間際の震災にて寺史を
はじめ重要資料を焼失、口承に
頼るものの多い内容でした。
創建時は、場所、名称(山号・寺
号)も違ってきます。

開創名は「亀鶴山萬歳院」

五百八十年前の文安2年
(一四四五)のご開山と言いま
すから、かの徳川家康公が浜松
城に入る(元龜元年一五七〇

年)二二五年前、現在地より南に
三百メートル、「お城の近くに
…」と歴史文書は伝えていま

さて、当時の城とは古城とも
いわれる引間(曳馬)城のこと
で、残された絵地図から推測す
ると、新生の現・浜松城の半分以
下の規模でした。場所は、現在の
東照宮が中心と言われています。
この一千四百年代はご存じの普
濟寺十三門派十四力寺の多くが
中部地方各地で嗣法独立。新豊
院、龍泉寺、宿蘆寺、天林寺、西来
院、宗源院の六カ寺が浜松の地
内でした。

応仁二年(一四六八年)、ご開
山の傑堂大和尚は二世の太春大
和尚に天林寺を託し、かねてよ
り請われていた常光寺(田原市)
を開山、渥美半島ほかにも教線
を拡げ、やがて同地にて自ら穴

に入り示寂されます。

三世満室大和尚は永正十三年
(一五二一年)伽藍を現在地に移
され、今日に続く礎とされます。
推測するに、十年ほど前の地震
に続き再び遠江に大地震が襲来
(…浜名湖今切口が切れ完全に
海につながった)街の中心部、古
城の周辺にも影響があったかと
思われます。

その後大永二年(一五二二年)
亀鶴山大安寺、ついで亀鶴山天
徳寺と名を改めました。ご承知
の三方原の合戦時(元龜三年・
一五七二年)には戦火を避け井伊
谷村に一時避難、留守僧と家康の
奉行たちが本寺に詰めるといっ
た危機も乗り越えて来ました。

現在の真徳山天林寺になった
のは天正十三年(一五八五年)で、
居城十七年の家康公が駿府に移
る前年でありました。

従来、お寺の創建には、開基と
言って物心双方のご尽力を頂
戴します。ほとんどが大名や豪
族：富豪ですが、当山にはその
記録は見えませんが、その時
代・時期に多くの皆さまのご指
導ご尽力を頂いて今日へ続く
のですが、家康公からの御朱印
十八石をはじめ、元和五年から
寛永十五年(一六三八年)
まで城主だった高力忠房から
寺域を南北九町余(約一〇〇〇
米)・東西四町(約四四〇米)と定
められました。七堂伽藍も整い

檀信徒はじめ、時々の為政者か
らのご援助も頂戴し、寺勢は大
いに高まりました。時も流れ家
康から秀忠、家光と天下も移っ
ていった頃の話です。

墓地からの帰り花屋橋から南
を望み、ビルの増えたこと、切れ
目のない車両の列に驚きまし
た。ふと、ご開山が初めて庵を結
んだ場所はどこかな?と想像:
特定できない歯がゆさが残りま
した。と言うのも家康公が改築
した折「北の守りを左谷、鹿谷、
池川谷と自然の要害を利用し
た」との話には合点がいきまし
たのに…。

大きく時が移り、境内を二分
する道路計画に協力、承諾した
先代の決断。地域へのご恩返し
である。その橋の上で次に思っ
たのは天林寺五百八十年の変わ
らないものは何だろう?と。
草創の地は不明確でもすぐに答
は浮かび、得心できました。

それは、寺によって結ばれて
いる檀信徒さんを始めとする世
間との「ご縁」であろうと。
目に見えず言葉では説明でき
にくい言葉であるが、私にはそ
の一語しか浮かばなかった。

難しいことの多い新年を迎え
ました。どうぞ健康には留意し
て、大切にお過しに成りますよ
う祈念しております。

和尚のつづき

全力で「今」に向き合う。

枕経やお通夜の席で、物事を進める順番について思うことがあります。

枕経に伺った際に、四十九日法要についても話が及び、ご説明しております。お葬儀の後に調整がし易いように、目安の日にちをお伝えするのですが、中にその場で決めようと話を急ぐ方がおられます。

「皆が揃っている時に決めよう」という考え方はいたって合理的で普通の発想だとは思いますが、お寺では「お葬儀も終わっていないのに、四十九日？まずはお葬儀にしっかりと向き合って、それから四十九日法要に取り組む」と言う考え方があります。

合理的に物事を進めるのも大切だが、ひとつひとつしっかりと向き合って事を進めていくことが大事、と言う考えですね。

また、お通夜で時々聞かれることも少し似ています。

お通夜では、故人の俗名でお勤めさせて頂きますが、白木のお位牌やお塔婆はすでに祭壇に設けてあり、必ず参列の方々の目にとまります。そこで、「戒

名はなんて読むんですか？意味は？」との質問がよく出ます。ここでも、順番、と言うことで「まだ戒を授けておりません。葬儀で戒を授けました後にご説明させて頂きます」とお答えしております。

これも、ある意味物事の順序として「戒」という「仏弟子」として「戒名」が生まれるのであり、「戒を授けてもいないうちに、お話できない」と言う事になってしまうのです。

この順番を守る話は、仏教が「今」を大事にしている所から来ているゆえんでしょう。「過去」は過ぎ去ってしまった事実「変えられない事柄で、教訓にはできても、いつまでも引きずるものではありません。」「未来」もまだ起きていない将来の事柄です。先のことばかりに目をやっていると本末転倒です。

先行きが不透明で不安の拭えない昨今ではありますが、あくまで「今」の積み重ねが「未来」になるということは忘れないで頂きたい。「今」を大切に一所懸命に過ごせなければ、明るい「未来」も難しいのでは無いでしょうか？



大切にしたい 「夢」と「緑」 永松寺 長谷川敏正

今回は、「リメンバー・ミー」と言う映画をご紹介させて頂きます。デイズニーのアニメ映画で二〇一八年(平成三〇)に日本でも公開されております。

メキシコの伝統文化である「死者の日」を題材に、夢に情熱を燃やすことの大切さと家族愛の尊さを描いた物語となっております。物語の舞台はメキシコのある街で、そこに暮らす音楽好きの少年が、音楽禁止！という家庭環境の中で、自分の夢を諦めず、夢をつかむ為にチャレンジし努力していく物語です。

この映画の中で興味深いなと思ったのが「死者の日」というメキシコ文化です。これは「一年に一度、他界した先祖が家族に会いに来る」という日で、普段は死者の国で楽しく暮らしているご先祖様達を、各家、自宅の祭壇に故人の写真を飾ってお迎えします。ちなみに、写真を飾らないと来られなくなり、自分(故人)のことを覚えていない人(…写真を飾る人)が誰もいなくなってしまうと、会えないだけでなく、二度目の死(…完全な死)も迎えてしまう。そんな、日本のお盆と似たようなご先祖様を大事にする文化が、日本からかなり遠い国のメキシコにあるというのも面白いな、と思えました。

一方近年の日本では、個人主義的な価値観が強くなってきた中で、先祖供養をはじめ人間関係が以前よりだいぶ薄くなってきていると感じます。今一度、ご先祖様、家族というものを見つめ直すきっかけになればいいな、と期待しています。

また、音楽禁止！という音楽に嫌悪感のある家族の中で自分が大好きな音楽を、諦めずに追いかけて続ける姿勢も、非常に素晴らしいことですね。最近では、進学や就職をしても、ほんの数か月で「思っていたものと違う」と言って、辞めてしまい「やりきる！」根性のようなものも薄れてきているとも聞きます。

「石の上にも三年」とは言わなくとも、周囲と相談するなど、もう少し工夫努力を重ね、早計に判断を下すのみでなく、簡単に夢や御縁を捨てない世の中であってほしいと思います。(合掌)

「微笑」をふり返る(二)



先号では、創刊の言葉、臨時増刊号などに触れました。

無常であるから尊い：

方丈は道元禅師の生誕八百年の年にちなみ『正法眼蔵』からすべてのものあり様は「無常」であり、「無常であるから尊い（…仏性）」と云われている」と檀信徒に語り掛けました。

人生五十年と言われたり、昨今のように寿命が伸び停年が延びようと、地球や宇宙規模からみればほんの瞬時のこと…お釈迦様の掌と孫悟空のお話のごとくでしょう。しかし、「無常」だからこそ生き甲斐があり、大切に生きねばならない。かの一休禅師の歌、正月は冥土の旅の一里塚めでたくもあり、めでたくもなし…も、めでたくするしないは各人の在りようひとつと論じているのです。

どうぞ皆さんも「無常」の意味を覚っておめでたく過ごされる

よう、と巻頭に説いている。

(第三号・平成12年)

子歳生まれは新築、申は補修…

平成三年(一九九一)に晋山した文元方丈は任職十年目を迎えたこの年、よく言われる「先代禅覚大和尚はネズミ年生まれからか？建物をたくさん建てた」の評に触れている。

まさしく前任の大安寺の本堂復興をはじめ、天林寺に住職してからも全山にわたり伽藍の復興に身を尽くされた。本寺普濟寺さまから「重興」の位を頂戴したほどで、生涯をかけて取り組んだと申しても過言ではない。しかし、墓地の整備までは及ばず終正残念がっておられた…

「その墓地整備からが小柄の宿題となったが、先代とは違い新築よりも改築補修が中心：で」と断りながら庫裡、書院、本堂の改修、山門の修復などを挙げています。

(第四号・平成12年)

なるほど、その後も天真閣の修繕、切通し側面の補修工事など、皆さまご存じの工事が続いているが、申歳のめぐりあわせか？補修工事が大半である。

本堂に響く琵琶のバチ

筑前琵琶演奏家・上原まりさ

んが「道元さまの生涯」を語られ、間近に響くバチさばきに感動され、熱い拍手が沸いた。

「ほとけさまの物差し」を伺う

宗教研究家のひろさちや氏の命名になる「仏教に親しむ会」の第一回講演会が開催された。優しい言葉で柔らかく、ユーモアいっぱいのお話は終始会場に笑いを生み、百二十余名を愉しませた。(第五号・平成十三年)

方丈、萱垣稲荷様を訪問

萱垣稲荷茶枳尼真天とは、かの寒巖禅師が道元さまの使いとして二度目の中国からの帰途海上で遭遇。いたく感得(感じて会得：道理を覚ること)されたことから祀られる寺院は多いが、当山のお稲荷さんは縁あって萱垣山願王教寺(天台宗・長野県飯田市鼎一七二四)から勧請頂いた仏法の守護神です。

以前ご来山下さったこともあり、今回は方丈自らのルート訪問ですが、多くの福祉施設を運営され多忙な住職さまにお時間を頂き、急ぎの日帰り訪問となりました。伊那谷に開かれた歴史豊かな寺院で多くのご信者が信奉されるが、信州の歴史を知ろうえでも欠かせぬ古刹です。

長野県と言っても飯田市は三

遠南信道を使えば近い存在で、お近くへお出かけの際にはぜひご参詣なさるようお勧めします。(第八号・平成十四年)

近聞遠望

法寿院さま晋山結制

寺脇町の法寿院(伊藤晃裕住職)さまにて令和六年十月二十五・六日に晋山結制が営まれ、長男健太氏が首座和尚としてお勤めになられた。…晋山結制とは、住職の正式就任を指し、就任を祝うと共に信仰と修業をさらに深めるため近隣のご寺院さまに参集願って大問答をする法要でもある。



法寿院晋山結制式

見海院さまご葬儀

去る十一月四日、公私にわたり当山に寄与された東伊場の見海院清水芳俊元住職および清水道雄住職の合同葬儀が営まれました。病気のため志なかなばで逝去されたご両所のご冥福を衷心より祈念申し上げます。

〓報告いたします

大般若会・新年拝賀式 一月十二日

元旦に北陸地方を襲った地震が生じ、一日には羽田にて飛行機衝突事故が発生した。二一年に復旧修理を終えたばかりの總持寺祖院(輪島市)も再び被災するなど各地に大きな被害が出た模様。予期せぬ地震の発生に参会者にも緊張が漂う中であつたが、例年通り修行の場を散華で清め、大般若会、続いてご開山・傑堂義俊禅師への新年拝賀式が執り行われた。

法要後、方丈は改めて能登半島地震に触れ、哀悼と共に支援の意を表せられ閉式となつた。

稲荷大祭 二月十一日

コロナ禍の中断もあり五年ぶりの開催である。

九時半、事務局の敏正師の進行で天林寺方丈のごあいさつ。特に能登半島地震へのお見舞いと募金に触れられる。十時からは福引や茶会も始まり、半過ぎには大道芸の田中さんが初披露。

昼を過ぎても冷たい風は収まらず気温も気運も上がらない。ところが、お客様には好都合?で、ゆっくり店主と話ができた品物も選べる。

午後三時、銀地に金の模様袈

裟をまとつた方丈が僧を従え稲荷堂に上る。両脇に僧侶、方丈は正面に端座。般若心経に続き真言が読まれ、転読もされた。

春の彼岸法要 三月十七日

「マスクは各人の判断に…」はお寺の指針?であるが、インフルエンザ感染への防備など、ここに来て再びマスク着用が目立ってきた。

ご参列の檀信徒さんと共に彼岸法要は厳かに進んでいく。読経が続く中、回し香炉が手渡され、本堂を一巡りする。静かに祈る皆さん方は、ご先祖さまとお話されたであろうか?...

山門施食会(盂蘭盆) 七月十五日

今年の暑さは尋常ではない。特に当県は「高温」。注意を促すマスクの忠告がかまびすしい。

新盆家では案内を受けて、受付でお名前や住所を申告、薄いゴム手袋が手渡され一瞬戸惑う。が「精霊棚の水向け用です…」に納得:する。コロナ禍のもたらす小さな風潮である。

また、お願いした「ご一家二名様までのご参詣」が守られスムーズな流れであるが、コロナ異種発症!などの報道や混雑を避けて二回に分けて法要を挙行している。

内陣の東・西の間に用意された椅子が開式前にはほぼ埋まる。ゆつたり間隔の椅子席は風も通るが、本堂内は静かである。

二回に分けて、営まれる

午後一時、導師の文元方丈が入堂。案内の僧から「合掌、礼拝!」と一声。全堂挙げて法要に入る。般若心経を読み上げた後、導師が精霊棚に對面する位置に移り僧侶達も従う。

「山門施食会」に移り、読経。続いて導師は経をはさみ、個々に新仏のご戒名を奉読される。

朗々と経が流れる中、新亡家のご家族は精霊棚に向い、水を手向け、ご冥福を祈られた。

二回目の法要は三時の開式。短い間隔は汗が納まる間もないが、和尚様方の清涼な読経と無駄のない動きに荘重さが漂い、心からの供養が営まれた。

夕闇の中、山門では施餓鬼会...



秋の彼岸法要 九月十九日
秋の彼岸法要は、ご開山さまから、先代大圓禅覚和尚までの歴代ご住職さま方。そして、檀信徒家のご先祖さまの亡き靈に祈り、感謝し、子孫の安らかな暮らしを願うことにある。



維那和尚の経題読み上げの後、読経に入り、法語の奏上と続く。経が流れる中、香炉が回され参会者がその場にて焼香。ご先祖様への感謝、ご冥福を念じた。

〓案内いたします

●二月十一日(祭) 稲荷大祭

今年もにぎにぎしく初午大祭を開催します。皆様方のご来山をお待ちしています。

●三月十七日(月) 彼岸法要

午後一時三〇分開式です。

